

第2回 長野市活力ある学校づくり検討委員会 議事録（要旨）

【開催日時】

日 時 平成28年9月30日（金）午後2時から午後4時
場 所 長野市役所 第一庁舎 5階庁議室

【出席者】

（委員）

山沢委員長、風間委員、小林委員、志川委員、高橋委員、田川委員、西脇委員、藤澤委員、松岡委員、丸山委員、鷺澤委員

（長野市）

近藤教育長、松本教育次長、熊谷教育次長、小池教育次長副任兼総務課長、上石学校教育課長、倉島主幹兼小中高連携推進室長、塚田主任指導主事、新村係長、菊池主事、中村指導主事、増田指導主事、千野指導主事、島田指導主事、山岸指導主事、田中指導主事、関指導主事、深澤指導主事、藤森指導主事

【会議次第】

- 1 開 会
- 2 あいさつ（教育長）
- 3 協 議

「活力ある学校」について

教育委員会が実施する事業について

- (1) 幼保小中高一貫した教育の推進
- (2) 信州型コミュニティスクール
- (3) 地域発 活力ある学校づくり推進事業

連携推進ディレクター（鬼無里・中条・若穂中学校区）の取組

- 4 次回開催予定
- 5 閉 会

【会議資料】

- 資料1-1 「しなのきプラン29」（全体版）
資料1-2 「しなのきプラン29」（概要版）
資料2 地域発 活力ある学校づくり推進事業

【発言要旨】

（委員）

- 若穂地区住民自治協議会と若穂地区小・中学校教職員顔合わせ会等とあるが、住民自治協議会と教職員との関わりは、いつごろからどのような交流を行っているのか。

(事務局)

- いつから行っているのかはよくわからない。新学期の開始後、若穂地区の小・中学校の新任教職員が若穂支所へ集まり、住民自治協議会の皆さんと自己紹介等を行っている。

(委員)

- 小・中学校の接続タイプの複線ネットワーク型について聞きたい。連携の型の中で、完結ネットワーク型、分離型、併設型の小・中学校のまとまりはとても強い。しかし、複線ネットワーク型の小・中学校は地域との結びつきは弱い、一番人口が多い。そのような中で地域発の事業を発信できるのか。

(事務局)

- 次回詳しく説明したい。

(委員長)

- 私がイメージする「活力ある学校」とは、児童生徒に元気があること。子どもが得意なことを自由に行う活動の中から学びを得られること。それを実行できることが「活力ある学校」だと思う。当然、学校そのものにも活力がなければならない。
- 複線ネットワーク型は非常に重要であり、社会と個人の関係では今後きちんと議論する必要がある。
- 少子化が本当に進んでいる地域と、比較的そうでない地域と一緒に議論してよいのか、とういのは重要な点である。

(委員)

- 鬼無里の小学校と中学校は、児童生徒を合わせて50人という小規模校である。小中の一貫した教育を進めるのは、集団規模の確保が図れること、異学年交流授業・体験ができることが大きな要因。
- 本年度、小学校1年生から中学校3年生まで全員が奥裾花自然園奉仕活動に参加して、共同学習・実習を行った。また、本日と明日の鬼中祭において小・中合同音楽会を行う。これらは「活力ある学校づくり」につながるものと思っている。

(委員長)

- 鬼無里では、体育や課外活動はどのように工夫しているのか。

(事務局)

- 体育の授業は連学年で行ったり、中学校の運動会は地域と合同で行ったりしている。

(委員)

- 長野市の学力は小学校のときは全国平均より上だが、中学校になると全国平均を下回るという説明があった。中1ギャップが原因なのか。また、中1ギャップは全国的に見られることなのか、長野市が特に顕著であるのか教えて欲しい。

(事務局)

- 長野市も全国も同じような傾向があると思う。全国学力・学習状況調査の数値では、本市の中学生は厳しい状況にある。中学校は教科担任制になるなど仕組みが変わる、クラス・学校・友達が変わる、授業の感覚が変わるなど、いろいろな要素が複合して、中1ギャップや不登校に波及していくのではないかと。

(委員)

- 小・中学校の接続を4パターン（完結ネットワーク型、複線ネットワーク型、分離型、併設型）に分けているが、ABCの学力テストの結果において接続型の違いによる特色は見られるのか。

(事務局)

- 学校の特定につながることであり、数値は公表していない。一般的な傾向として、少人数で学習することにより基礎学力がつくという場合もあるが、学級担任の影響や年による集団の違いもある。複線ネットワーク型は、いろいろな学校から集まることにより切磋琢磨する良い雰囲気もあるが、一つの学校が複数の住民自治協議会と関わる場合、地域との一体感という点で難しい面がある。それを解消するため、連携推進ディレクターが取り組んでいる。

(委員)

- C学力が育っていれば、大人になって生きていく力は身に付くと思う。それは、どちらかというところ、学校の教室の中ではなく、いろいろなコミュニティの中で蓄えられるものだと思うので、完結ネットワーク型、分離型、併設型のC学力は高いのではないかと。そうであれば、コミュニティを絞って、学校だけでなくいろいろな所と関わる教育が有効だという仮説ができればよいと考えた。

(委員長)

- 重要な指摘である。

(委員)

- この問題について、長野市は全国の縮図だと思っている。地域を統一して議論すべきでないという委員長の考えに賛成である。活力とは何かと私なりに考えた。一つは子ども同士の豊かな関係、そして教師同士が育つ関係、もう一つは子どもと教師がいる学校と地域、保護者、家庭との関係。最近よく使われる言葉でソーシャルキャピタルがある。
- ソーシャルキャピタルとは社会関係資本、分かりやすくいえば、人と人との関係、これはC学力で育てようとするものだと私は考える。
- 接続パターン2の複線ネットワーク型の本校は、市街地にありながら少子化が非常に進んでいる。現在、学年に1つの学級しかない中で子ども達は6年間生活している。
- 2学級が1学級になり、いろいろと小さなトラブルが起こる状況もある。担任と子どもたちだけの関係では煮詰まってしまう、いろんな問題が起こる。特に小学校4年生以降、多感な思春期に入っ

た子どもたちの集団の在り方はとても難しく、小学校4年生から6年生が単級の学校の場合は非常に難しいと思う。

- 学校でも工夫し、教科担任制のような形で担任を入れ替え、多くの教師が関われるように取り組んだり、地域の方々による読み聞かせなど多くの大人との関係を作ったり、縦の異年齢交流もいろいろな活動を行っているが、それでも限界がある。
- 本校は中学校も複数に進学するため小中との連携も難しく、また、30近くの幼稚園や保育園から入学してくるため幼保小との連携もとても難しい。
- 市街地の小規模校では、日常の学校の学習を地域に開いて、学習の中でつながりを模索していかないと、なかなか活力にもつながりにくい。

(委員)

- 中学校における地域との連携は、まず時間をどのようにつくるかという問題がある。中学校では決められた時間の中で生徒は部活動も行う。小中の交流はできてきたが、中学校が地域に出て行って何かする時間の確保はとても困難ではないか。
- 学力は、一つの小学校が一つの中学校へ進学するのであればまだよいが、都市型でしかも一つの小学校に複数の学級がある場合は、学級ごとに学力が違うという現実がある。
- 長野市の事例ではないが、小規模な小・中学校に勤務していた事があり、その時、大きな本校へ行くときのギャップが非常に大きかった。今までは40~50人、小規模の中で何でも出来ていたし、地域の方もとても協力的だった。しかし大きな集団に入ると、そこで自分が否定されたと受けとめた子は、学校に通えなくなるなどの事例が起こった。
- 地域の中の中学生、地域の力、18歳になるまでを考える必要がある。

(委員)

- 来年度コミュニティスクールが全校導入になるという説明だが、それぞれの学校が何をやっているのか発表していただきたい。
- 市PTA連合会の集まりでも、一つの地域に一つの小・中学校、または複数の小学校と一つの中学校の場合は地域としてまとまっていてうらやましい。
- 市街地では小規模校、大規模校がある。地域、住民自治協議会や育成会との関わりなど、親の方が少々疲れ気味である。
- 児童が減っていく中で、児童を増やすことが大事なのか、今いる児童を活力ある学校で育てることが大事なのか。
- 地域で子どもを育てている小規模な学校でも小1プロブレムや中1ギャップは起こっているのか。

(事務局)

- コミュニティスクールの事例については次回説明したい。

(委員長)

- 今の質問に関連して、従来のPTAの負担がコミュニティスクールの学校運営委員会によって改善さ

れたという事例があれば教えて欲しい。

(事務局)

- 従来の PTA と地域の方が参加するコミュニティスクールは全く別であり、一緒にしようというものではなく、PTA は PTA で従来の活動を続ける。

(委員)

- 「地域」といわれるが、必ずしも住民自治協議会は学校教育に目が向いていないところがある。
- 住民自治協議会には PTA も入っている。PTA 役員は働く世代であり、とても忙しい。PTA 活動を住民自治協議会がどのようにサポートするのかを考えていかないと、学校という施設・団体だけに目がいってしまう。

(委員)

- 0 歳から 18 歳までの発達段階に応じた教育環境を用意したいということで、小さな学校が月 1 回あるいは週 1 回外部との交流を行うというのは、そうしなければならないからそうしている。
- ルールを守ってきちんと座って学び、きっちり自分のものにする時間と、友達と気に入った場所で遊ぶ時間がある。友達との遊びの中に学びの勉強もあり、気付きの勉強もある。友達と一緒に外で遊べる環境が 40、50 年前と比べるとなくなってきている。
- 発達段階に応じた遊びや学びがあり、子ども達が気づかぬうちに意欲とか C 学力とかがついてくるといいと思う。
- 遅れ気味の子に対して、タブレットを利用した支援ができるような体制を整えることも必要ではないか。そのようなことで実績があがった例があれば教えていただきたい。

(事務局)

- タブレットは少し導入し始めている。
- 子どもたちの発達段階に応じて、学校の枠組みや地域をはずして、子どもたちの人間形成はどうあったらよいかを考えていただけるとありがたい。

以上